

◆ 小学校朗読会 ◆

9月15日(木)	演目：「サリーさんの手」安房直子 「しあわせってなあに？」葉祥明 「よだかの星」宮沢賢治
----------	--

◇ 小学校朗読発表会 ◇

報告 日本語日本文学科3年 阿部果鈴

9月15日、緑園東小学校にて安房直子氏の著作「サリーさんの手」をグループ朗読いたしました。小学生を対象とした体育館での朗読で、小学生のみなさんは現役生とOGの発表を合わせて45分間真剣に聞いてくださり、非常に感謝しています。私は「サリーさんの手」のグループにいたのですが、今回の朗読会では、広く開けた空間である体育館では今の発声では声が予想以上に届かないということを実感しました。また、「サリーさんの



「サリーさんの手」を朗読中！



OGの「すずの音」も参加

手」は社会人になったばかりの若い女性が、不思議な体験を通して自分の仕事にやりがいと意義を見出すという内容ですが、小学生の、特に男の子にとっては少々感情移入しにくいものだったのかもしれませんが、しかし、私も、対象と遠い存在にある登場人物の世界を、対象に近づけられるような朗読がまだできていなかったということです。最後の発表であったOGの朗読グループ「すずの音(ね)」による「よだかの星」の朗読では、小学生の皆さんの集中力はすさまじいもので、物語が体育館全体の空気を掌握していました。今回の発表を機に、発声、滑舌の強化とより物語に感情移入した朗読がこれからの目標であると強く感じました。

◇ 小学校朗読発表 ◇

報告 コミュニケーション学科2年 山田優香

私は今年から朗読チームに参加したので、小学校での朗読会がお客様の前で発表する初めての朗読でした。そのため、私が読ませていただいた「サリーさんの手」という作品にもとても思い入れがあります。何度も本を読み込み、ひとつひとつの言葉をどう読んでい

けば聞き手に届く朗読になるのかを考える作業は、とても楽しく、良い経験になりました。「サリーさんの手」の練習中に鈴木先生がおっしゃっていた「なくてもいい言葉が置いてあるのには意味がある」という言葉は、私の中でとても印象に残っています。形容詞などの修飾語は、そこ置かれていなくても文章としては成立するけれど、そこに置かれているということは作者が伝えたいことがその言葉にあるはずなんだ、ということを考えるようになってから、他の本を読むのもより面白くなりました。小学校での朗読会当日は、小学生の子供たちが一生懸命私たちの朗読に耳を傾けてくれているのがとても嬉しかったです。今後もより多くのお客様を楽しませ、もっと聞きたいと思ってもらえるような朗読ができるよう、たくさんの本を読み練習を頑張りたいと思いました。



小学生のみんな、面白かったかな？

◇ 小学校朗読発表について ◇

報告 日本語日本文学科1年 穂積優香

9月15日に近隣の小学校で朗読発表を行いました。このイベントは私が朗読チームに所属して最初の発表でした。私は皆より遅くこのチームに入ったので、最初は不安が大きかったです。ですが、学年を超えて、メンバーの方々と一緒になって作品を作ることで、朗読を通して、仲良くなることができましたと思います。当日までは、先生のご指導の下、週に一度の貴重な時間に集中して練習をおこないました。少ない時間の中で朗読を上達させていくために、家での自主練習も日頃から心がけていました。時には、電車でボソボソ覚えている文を言ってしまうときも…。発表当日、練習をしてきたのはいいものの何より心配だったのが、小学生が朗読を聞いてくれるか、ということでした。けれども、朗読チームと同じくらい真剣にこの会を楽しみにしてくれていて、本番も一生懸命にお話を聞いてくれている子ども達の姿をみて、私の方が感動させられました。発表終了後には皆で成長したと実感できて嬉しかったのを覚えています。そのとき私はこの会の成功は、私たちだけ



小学校での朗読会、楽しかったです！

ではなく、今まで何度も朗読でつなげてきた“つながり”のおかげだと感じました。まだまだ短い期間ですがこのチームに入って何度も足を運んでくれる先輩方をみて、それを実感しました。これからまたこの経験を生かして、もっともっと朗読をしていきたいです。